

特集

藍より青き吉野川
川と人とのかわわり

Special Features

The Blue Color Yoshino River rather than in Color Indigo
Mankind and the River

吉野川地誌

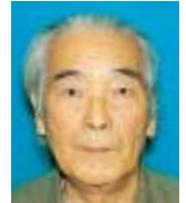
The Geography of the Yoshino River

吉野川の歴史

三好昭一郎

MIYOSHI Syoichiro

法政大学評議員



1 徳島城下の繁栄と吉野川

徳島藩は天正13年(1585)5月、豊臣秀吉による四国征伐に戦功が著しかった蜂須賀家政が、播州竜野(5万余石)から阿波を与えられ、18万石の大守として入部し立藩されている。家政は早速に吉野川河口部デルタ地帯の徳島に居城の構築を始め、城下町の町割に着手した。徳島城は吉野川(別宮川)の支流である新町川や寺島川、助任川が網のように流れるのを、自然の内濠や外濠として利用した巧みな構想のもとに工事を進めていった。

このとき以来、蜂須賀氏の歴代は藩の経済力を豊かにするために力を入れたのは、吉野川流域の農村が、毎年のような氾濫で稲作ができず、米の代作として栽培してい

た染料の原料である蓼藍を保護・奨励することであった。藍は節分のころに種を蒔き、夏の土用に刈り取られ、洪水の被害を避けることができるので、急速に藍の作付面積は拡大されていった。藩ではさらに藍の生産を高めようと、寛永2年(1625)に藍方役所を置いて技術指導にも取り組んだ。その結果として明暦・万治期(1655~60)には栽培面積が数百町歩と記録されている。すでに当時から阿波の藍商の江戸進出もみられるが、寛文・延宝期(1661~81)には大坂進出も目立ってくる。その背景に日本の衣料革命といわれ、国産の木綿生産の急激な発展があったことはよく知られるところである。

藩では5代藩主綱矩つなのりの下で、藍の需要が急増したことを背景に、生産地と徳島城下の水上輸送を便利にするため、吉野川本流(現旧吉野川)を分水して、別宮川(現本流)に流すことを計画した。当時の別宮川や城下を流れる支流では、湯水期になると船の通行もままならなかった。こうして寛文12年(1672)に本流からの通水路が掘り抜かれている。

ところが水路となった板野郡いたの第十村(上板町)と祖母ヶ島村(藍住町)の村境では高低差が大きかったので、水はたちまち激流となって対岸の名東郡東黒田村(徳島市)に押し寄せて、70戸の農家と広大な畑が崩落し、川原に変わってしまった。それで村の半数の家と土地を一挙に失った。これは明らかに藩の設計ミスから生じた人



図 - 城下の古地図(天和年間のもの)



写真1 - 藍住町前須付近(本流化によって耕地を増やした一帯)



写真2 - 第十堰を行き交う平田船(大正5年)目で見る徳島の100年(郷土出版社刊)所収

工の災害であった。こうして吉野川の本流は一瞬にして別宮川にその地位を奪われた。そのことは同時に旧本流の水位を低下させたのであるから、その流域の農村では深刻な水不足に悩まされた。それが最近の話題を集めた第十堰を築かなくてはならなかった理由である。

2 吉野川は阿波経済の大動脈

そのような流路の変更は、流域の住民に大きい損失を与えた未曾有の出来事であるが、吉野川の水上交通と物資の円滑な流通に道を開いたという面では、画期的な意味をもっていたといえよう。その水量も豊かになった徳島城下の河川には、かなり大きい船も通行できるようになった。とくに新町川の西船場町と対岸の新町船場町には、江戸と大坂をはじめ諸国の藍市場に藍玉を販売する藍商たちが郷村部から進出して、店舗や食庫が建ち並んだ。こうして吉野川流域で産出された藍玉を集積し、藩外市場からの注文に応じて出荷できる体勢を備えていった。

ところで蓼藍の栽培には大量の金肥を必要とした。そのため兵庫(神戸)などから送り込まれる肥料の集積にも、当然倉庫を必要とし、吉野川流域農村に金肥を供給するために、毎日のように船に満載して吉野川を上流に向けて輸送したのである。

そうにして新町川の景観が一変したことによって、徳島城下の空間構造と経済活動に予想を超える大きい変化をもたらすことになった。それが阿波のその後における経済発展を象徴する大変化であったことはいうまでもない。

3 吉野川と流域の人びと

吉野川は高知県に源流を持ち、北流し三好郡池田町の中心部で流れを東に変えて徳島市まで貫流して紀伊水道に注いでいる。いまは池田と徳島間は鉄道や四国縦貫自動車道など、すべて陸上輸送に頼っているが、半世紀

ほど以前には、肥料や雑貨などを上流へ、またその帰りに木炭や薪などの燃料をはじめ、中上流域の産物を満載した平田船が行き交って、長閑な風情がみられたものである。

吉野川の本格的改修工事を指導したデ・レーケは「吉野川検査復命書」に、池田と徳島間の舟運について、「通船路八先ツ池田ヨリ幹川ヲ下リ第十村ノ下ニ在ル吉野末流ニ沿ヒ三合ノ地ニ至リ、夫ヨリ榎瀬川ヲ経、別宮川ヲ過キ、而シテ徳島ニ達ス、又夕撫養海峡ニ出ツルニ八三合ノ地ヨリ撫養川ニ至ルナリ」と記しているが、徳島まで直行することを避けたのは、第十堰が通行を妨げたためである。こうして徳島から上流の川湊に向かうには、支流を航行して大きく蛇行しなくてはならなかったのであった。

逆に徳島市街から県下第2の町で、製塩業で栄え藍玉などを積出し、肥料などを大量に運び入れた撫養町(鳴門市)とは巡航船で結ばれていた。それは明治25年(1892)から阿波巡航船会社によって運営されていた。新町川から別宮川に出て榎瀬川・撫養川河口の文明橋に至る航路で、その間に約4時間を要している。こちらは吉野川の通行を妨げていた第十堰を迂回する必要はなかったのである。

このようにして吉野川は阿波の経済と生活上の大動脈として、人びとに印象づけてきたし、だれにとっても身近な川として親しまれていたのである。

ところで吉野川の幅員は上流域で700m、河口部だと1,300mという大河である。この大河に永久橋が架かるのは、昭和2年(1927)の三好橋、同3年の穴吹橋と吉野川橋の3橋であった。これで上流・中流・下流部にやっと安心して利用できる橋が架けられて、両岸が陸続きとなったことから、それらの地域の発展には大きく貢献したのだが、橋を常に利用できる住民は限られていて、大部分の人びとは渡船で川を渡らなくてはならなかった。そのため流

域には92の渡し場があってよく利用されたが、洪水や強風で欠航したり、犠牲者を出すなど不便さと危険性を伴ったことはいうまでもない。そこで少しでもそれらを解消しようとして改善策を講じたのが岡田式カンドリ舟の就航である。

これは大正3年(1914)ごろから本格化するが、説明する余裕がないので省略する。渡船では到底その不便さは解消できなかったが、ただ乗客と船頭、乗客同士のコミュニケーションの形成は自然の成り行きで、心温まるものがあつたことは忘れられない。

さて、吉野川流域の農村部には、ノッポの地蔵尊が至る所で見られる。板野郡藍住町東中富の竜地の辻に聳え立つ幕末の地蔵さんなどは、その台座を含むと約3mもある。嘉永の大洪水で、この付近では地蔵さんの頭まで水が押し寄せたという。また同町乙瀬の旧吉野川堤防上に建った地蔵さんは、慶応3年(1867)の寅の大水として有名な大氾濫の犠牲者の名前が刻まれていて、その供養のために現地に造立したと記されている。また大正2年(1913)の洪水もこの地方に莫大な被害を出している。当時の村役場で作成された被災報告書などに目を通していると、吉野川の怖さを身に染みて感じさせられる。

もしもこんな洪水に見舞われたら、などと考えると、いったいそれにどう備えたらよいのか、私たち流域住民は真剣に対策を考えなくてはならないと思う。洪水が歴史的に残してきた遺産は多く、そこから汲み上げなくてはならない教訓は無数に見出すことができるはずである。

4 怒ると怖い吉野川

私も集落全体が水に浸り2階まで床上浸水、平屋建ちの農家は全く姿が消えているという見聞をしただけでなく、わが家のすぐ隣の家の母屋が本流と化し、付近一帯が水びたして家に帰れなかった体験もさせられた。それだけに洪水遺産には若干神経質になるのかも知れないが、決して思い過ごしではないと信じている。いま私の住



写真3 - 東中富竜地の高地蔵



写真4 - 石垣を高く積んだ農家

む藍住町では、犠牲者の供養碑としての地蔵尊だけでなく、高い石垣を見事に積んだ旧家も多い。これらはもとより洪水から家屋を守るための手段であるが、それらの旧家で調査をすると、母屋や納屋の壁の色が異なるものがみられる。色が濃くなっている高さまで浸水したことを伝える貴重な痕跡である。

吉野川本流の改修事業が完成するのが昭和2年のことであり、支流は別としても本流では氾濫するなどということ、本気で心配する人は流域でも少なくなっている。しかし、それは余りにも樂觀的であるという以上に無知だと断じなくてはならないだろう。そんな不安を他所に吉野川は今日も豊かな水量を誇るかのよう、人びとの心に大自然の美的な景観を見せつけて流れている。下流では河川敷の運動公園が延々と連なり、スポーツを楽しむ人たちの喚声が飛び交い、大いに賑わいをみせている。また水上スポーツに興じる楽しそうな風景、こんな平和そのものの吉野川が永遠に失われないように心から願っている。

5 吉野川の未来に向けて

そんな願いに吉野川は本当に応えてくれる保障はどこにもないのである。徳島藩は藍作を保護するために、本格的な改修工事を控えてきたなどという、まったく見当違いの歴史を語り、聞く人もそれを信じてきた。とんでもないことである。江戸時代もっとも有利な作物は米であった。藩も農民たちも米作によって安定した収入を、また生活を夢に描いていたのだが、その改修には一大名の力でも手がつけられなかった。藍しかないという切羽詰まった土俵際で、育った産業でしかなかったというのが史実である。これからの吉野川を考えるためには、史実から学び取らなくてはならないことが多いし、また水との死闘や藍を育てた祖先たちの知恵についても、十分に知ることが大切であろう。